

幻魔大戦 20

光芒の宇宙

平井和正



げん ま たいせん
幻魔大戦 20

ひら い かず ま き
平井和正



角川文庫 5389

昭和五十八年二月二十五日 初版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二丁目十三番三

電話東京二六五—七一一（大代表）

〒一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——大日本印刷 製本所——本間製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0193-138334-0946 (0)

幻魔大戦 20

光芒の宇宙

平井和正



角川文庫 5389

河合康夫は、遙か年下のほっそりした少女と連れだって、青山通りを歩いていた。

なぜか、この十歳の少女と肩を寄せ合って歩いていると、平安を覚えるのである。なぜだかわからない。他のだれというよりも、気持が落着くという事実があるだけだ。

よほど過去における縁生が深いのかもしれないと思う。康夫は元来、孤独癖のある人間で、表面的にはともかく、しんから慣れ親しむということはほとんどない。外面的には社交家で、如才がないように見えるが、内面は用心深く慎重であり猜疑心が強いとさえいえるほどである。だれかれ構わず気易くつきあっているようだが、内実は打算的とさえいえるほどであって、滅多に他人に心を許さない。東丈や田崎宏などは、過去の縁生の濃密さがもたらす吸引力が働くので、他の会員や塾生たちとの間は、他人目にはどう映ろうとも、通りいっぺんのつきあいの域を決して超えることがない。

己れの猜疑心の強さに自己嫌悪を覚えることもないではないが、それが己れの性格の基本的なものであることを康夫は自覚していた。本能的に相手の意図する裏の裏まで読み取ろうと身構えてしまうのである。

表面的にはどんなにリラックスしているように見えても、彼は用心怠りなく、相手の裡に裏切

りや攻撃のサインを見抜こうと緊張しているのだった。特に己を利用しようという底意を秘めてかかってくる人間に対して、康夫はこの上なく鋭敏であった。そうした人間と数多くつきあってきたゆえに、軽薄さや如才なさで相手を韜晦する（とうかい）という処世術を早くから身につけざるを得なかったのかもしれない。笑顔や親しげな気易さは、あくまでも表面的なものであり、保身のテクニクなのである。いつも裡には鋭く敏く、抜け目のない心が働き続けている。

そうした康夫の警戒心をなだめる人間は、東丈や三千子の姉弟、田崎や市枝などほんの数えるしかない。五指に足りないほどだ。

それが、十歳の少女、田代光子（たしろこうこ）に対してだけは、奇妙なほど心がくつろぐのだった。それは木村市枝に対する心の傾斜などとまったく性質の異なるものである。

市枝には異性として惹かれて（ひ）いるが、やはりくつろぎを与えられるよりは、常に緊張感をそそりたてられる。木村市枝は他人に緊張をもたらず娘である。常に張りつめた心が、接する相手に気持の弛緩（しかん）を許さない。

市枝は鋭敏すぎ、繊細すぎるのだ。異性として吸引力は働いても、それは絶え間ない緊張関係であり、くつろぎからは遠ざかる一途（ただ）を辿る。

それはスリリングであり、嫌悪すべきものではないが、いってみれば、市枝は疲れる相手なのである。

とはいえ田代光子が決して鈍感で大ざっぱな性格というのではない。逆に木村市枝以上に繊細

で鋭敏な心の持主といえるかもしれない。無口であり、何を考えているのかわからぬという測りがたさでは、むしろ難物といえるのかもしれない。

塾では、光子を扱いにくい手の焼ける女の子とみなしている傾向がないではなかった。光子が精神的にきわめて屈折しており、容易にうちとけない性格であることは、だれの目にもはっきりしている。いかなる視点を持っても、彼女が素直で優しいという評価を引き出すことは不可能に近いであろう。

一筋縄では行かない手強い女の子という印象は、いかに好意的に接近してみても、決して修正される余地がなかった。

しかし、康夫はどうしてか、その難物の少女光子といっしょにいと、心和み、くつろいでくのである。

決して少女に対して気を遣わないというのではない。普通以上に細かい心遣いを示し、あれこれとサーヴィス精神を発揮して、相手を楽しませようと努力を払っているにもかかわらず、少しも気疲れしない。底なしの活力が湧き出てきて、新鮮な気分になんてくれる。

当の相手の光子も、そうした康夫の努力が煩わしそうではない。他の塾生たちには気を許さない固さを保持し続けるのに、康夫には別人のような寛容さを発揮しているようであった。

要するに合性がいい、ということなのかもしれない、と康夫は思う。光子は八歳も年上の康夫に対して、妙にお姉さんぶった、年長者意識を抱いているようであった。少女から見ると、康夫

は非常に危つかしい性格の持主であり、保護されるべき「少年」ということなのであろう。

夜の青山通りは、車の流れが繁かった。まだ宵の口といった時間で、人通りも少くない。ファッションの最先端を行く新しい盛り場としての地位を六本木、赤坂から奪取しかけている趣きがあった。東京オリンピックで拡張された青山通りに沿って、洒落た真新しいビルが続々と建ちつつある。

旺盛な遊び心に満たされた若い男女の姿が多い。原宿から青山通りにかけて、ヤング世代のメッカが形成されつつあった。しかし、その最先端のシーンにあっても、小学校四年の少女と連れ立っている康夫は異色といえたであらう。

夜気は冷えて、そぞろ歩きの季節ではなかった。まだ二月下旬なのだ。いつも車に乗り慣れている康夫は、薄手のカーコート一枚を着こんでいかにも寒そうだった。それに引きかえ、少女はスキー用の分厚いスウェーターに着ぶくれ、毛糸の手袋をはめて、ぬくぬくとしていた。身を切る夜風の冷たさにもめげず、顔は赤らんで元気そうであった。

「寒いかい？」

と、康夫は答がわかりきっている問いを發した。少女は少しも寒がっていない。活発な生体エネルギーに充滿しているのだ。

「ううん。手袋貸してあげようか？」

と、少女がいった。さっさと手袋を脱いでしまう。行動はあくまでも迅速であり、果敢なので

ある。

「いいよ。だって、光子ちゃんが冷たいだろう？」

「いいの。あたしは若いから平気。若さのエネルギーで満ちてるもの。さあ、はめて」

「しかし、これはちよっと……可愛すぎますね、あたしには」

「お兄さんは可愛いから、ちよっどいいじゃない」

少女は平然といい、華やかな色彩で編まれた毛糸の手袋を、康夫の手に押しつけた。

「手、凄く冷たくなってる……風邪引いてしまから。暖めてあげようか」

少女の素早い手が、康夫の手をぐいと握った。躊躇いや戸惑いのない感触であった。康夫は自分分が、少女の正当な所有下にあるという気にさせられた。最初に逢った時から、少女によって素早く所有権が確立されたのかもしれない。

まるで仔犬を拾うように、彼は少女に確かに所有されてしまったらしい。それは少女にとって異常な行為であり、生活態度の特殊な変更だったに違いないのだ。少女はありとあらゆるしがらみを超克することを決意して、人生に決然と挑戦していたからである。

「どうもすみません。お手数おかけして」

と、康夫は殊勝げにいった。そうした調子が少女を喜ばせるのを知っていたからだ。大人扱いにされるほど、少女をいい気分させることはなかった。康夫はサーヴィス精神を流露させて華やかな毛糸の手袋を両手にはめてみせなければならなかった。

「似合うわよ」

と、少女が満足していった。

「さいですか。ま、スキー場にいると思えば……」

「マフラーも貸してあげる」

「しかし、それは、いくらなんでも」

「いいの。あたし、体が熱くなつて、火照^{ほて}っちゃつて、どうしようもないから」

少女は背伸びして、康夫の首のまわりにマフラーを巻きつけた。庇護者^{ひごしゃ}気取りを楽しんでいるのだった。康夫は少女が自分のスウェーターも着ろといいだすのではないかと心配した。

少女は、康夫とともにいる限りこまごまと世話を焼こうとしたし、少女の気持を傷つけまいとする以上は、それを受け容れるほかはなかった。

時折、康夫は、少女が母親気取りなのではないかと感じた。それは必ずしも不快なものではなかった。不出来の薄情な母親を持った康夫には、少女の気取りは目新しく、魅力的ですらあった。少女は思いがけぬ父親の帰還で、それまでの母親に対する庇護者の立場を失ってしまった。この十歳の少女は、自分の母に対してさえも庇護者として振舞ってきたのである。その立場を失った代償として、今度は康夫に対し、庇護者の役割を演じようとしているに違いなかった。

「お兄ちゃんは、市枝さんのこと好きでしょう？」

と、歩きながら少女は唐突にいった。少女にはそうした思いがけない攻撃性があり、康夫を面

食らわせるのだった。そんな時、彼は少女に女を感じた。女とは何を考えているのかわからず、常に予測しがたい存在である。そうした意味では、木村市枝は少年ばいとさえいえる。何を考えられているのか読み取ることが不可能ではないからだ。明解な思考形式は男のものだが、市枝もまた不可解な女の生理にひきずられず、明解にものを考えることができるのだった。波長が女のものではないのだ。

「そう見えるかい？」

と、康夫ははぐらかした。しかし、少女はストレートであり、躊躇いを知らなかった。

「本当のことって。あたし怒らないから」

「友達なもの。彼女が東丈先生に引き合わせてくれたんだ。いってみれば恩人だな。でも、それ以上の気持は持っていない」

「そうシラジラと嘘をつかれると、怒りたくなるわ……」

「彼女は男みたくさっぱりした気性だろ？ だから友達づきあいやしやすいのさ。いろいろ変に勘繰ったりしなくてすむんだな。彼女が、だめよっていったら、それは本当にだめなんだ。他の女の子だと口でそういっても本音はいわよってこともあるんだけどね。市枝には駆引きがなく、いつも本音の部分でつきあえる。あいつはこんなことをいったけど、本当にそうだろうか、と悩んだりしなくてすむ……たとえば、市枝に向ってデートしないかって誘うとする。そうすると、ふざけんじゃないよって一言で終りだね。それ以上しつこく誘えば、ベシッとひっぱたかれ

て終りなの」

「つきあえよって誘ったことあるの？」

「ないよ。ひっぱたかれるのはわかりきっているからね。市枝は男嫌いでね……それに東丈先生にお逢いしてからは、ますますそんな感じじゃなくなった。市枝の心の中には、先生のことしかないんだ」

「男嫌いでも、東丈先生は別なの？」

「つまりね、市枝にとっては、先生は素晴らしい偉大な父なんだな。最高に偉大な魂の父なんだ。男嫌いとかそんなのはまったく関係ないんだ。市枝は朝起きた時から、夜遅く寝る時まで、ずっと先生のことばかり考えている。しんそこから、先生を崇拜し、尊敬しきっているんだ。他のことを考えてる暇はない。もうだれが好きだのなんだのっていう低次元のことは超越しちゃってるんだな。わかるかい？」

「わからない。女が男の人を好きになるってとっても自然なことでしょう？ 市枝さんが東丈先生に夢中だっていうのは、そういうこととは違うの？」

「全然違う。市枝にとっては、先生は男性を超えた存在なんだ。偉大な魂の父、つまり神様みたいなもんだな」

「生き神様なの？ でも、先生は男性として物凄く綺麗きれいなんでしょう？ ギリシャ神話のアポロみたいに美しいんだって……？」

「まあ、そんなイメージだね」

「そんなに物凄く綺麗な男の人に夢中になってるのに、好きになるといふのは違うの？」

「違うんだな、それが……まだ光子ちゃんにはわからないのかな？ こっちとしてもいささか説明しにくうございますね」

「お願い、説明して。市枝さんがなぜそんなに夢中になって尊敬したり崇拜しているのに、恋愛とは違うってことがわからない。男性と女性の間には、友情なんか存在しないっていうでしょ。あたし、それを信じてるの。先生と生徒の間の師弟愛っていうの？ そういうのも信じないな、あたし。見てると、とっても妖^{あや}しいもの。口ではきれいなこといっても、腹の中は大違いで、嘘ばかりって感じ」

「本当かい……」

康夫は、少女が霊覚の持主であることを想い出した。少女には偽善が通用しない。簡単に見透かされてしまうのだ。

「じゃ、市枝は先生に対してやっぱり恋愛感情を持ってるの？ 師弟愛なんかじゃなくて、ただの女と男の間の妖しい気分かい？」

「別にそうじゃないけど……市枝さんのことをどうこういってるわけじゃないわ。学校の先生のことをいってるのよ。心の中はとっても厭^{いと}らしいものでいっぱいなんだから」

「学校のセン公なんか問題外だよ。奴等は並みの人間より以下だから」

学校教師嫌いの康夫は力をこめていった。

「並みより低級な奴等が教師になるんだ。幼稚で女々しくて低劣でどうにもなりやしねえや。まともな人間なら、もうちつとましなことをやるってえの」

「お兄ちゃんって凄く先生嫌いなのね？」

「嫌いも何も、地上にあんな奴らは生かしとくべきじゃないね。世の中を毒し、子供を駄目にし、人類を破滅させているのは、あのセン公どもだね。俺は生れてこの方、一人でもまともな教師なんかにお目にかかったことないんだから。だからさ、俺は医者に向つてもセンセイというの厭だった。口が裂けてもいいいたくないんだ。ところが先公って輩は、センセイって尊称をたてまつらないと怒り狂いやがるんだね。『センセイと呼ばれるほどの馬鹿でなし』っていうのによ。

とにかくセンセイと呼ばれないと腹を立てるっていう馬鹿は、政治屋と先公がいい勝負よ。中学のころ、どうしても先生って呼ばないもんで、先公によくぶっ飛ばされたね。人非人、犬畜生みたいに罵られた。だけど、心底から輕蔑してる犬の糞みたいに低劣な人間に向つて、スズキセンセイ……なんて呼べるか？ 俺には呼べないよ。せいぜいスズキサンよう……ってことになっちゃうわな。そうすつと殴る蹴るの騒ぎよ。いくらぶっ飛ばされたって、口が裂けてもセンセイなんていわねえよ」

康夫は興奮して、往時の不良少年の口調になってきた。昔の意識が甦ってきたのだ。

「先公に向つて頭を下げるくらいなら、ブスツとドテツ腹に穴をあけてやろうといつも思つて

たよ。糞みたいな奴等にゴマをするくらいなら、死んだ方がましだって思ってた」

「驚いた……お兄さんって本当は物凄く激しいのね。過激なのね。そうは見えないんだけど……」

少女は目をまるくしていった。

「愛想がよくて、人当たりがよくてって、みんなそう信じてるんじゃない？」

「そんなのは見かけだけさ。うわべだけ見たって、人間の本当の性格なんかわかりやしないってことは、光子ちゃんだって知ってるだろ」

「そりゃそうだけど……」

「とにかく、俺は尊敬できるまともな教師なんか逢ったことはないからね。ほんの少数だけど、いることはいるっていう人間もいるけど、俺はやっぱ信じない。そんなことをいう奴だって先公の腹ん中まで見通して、まともだなんていってるわけじゃないんだからさ。光子ちゃんにはわかるだろ？ いっぱしの人格者みたいな面^{つら}してたって、腹ん中はドロドロした汚いものではない。溜^{だめ}みたいになってるんだからさ。そういう偉そうな面した先公が陰で何やってるか、俺は調べ上げてガツチリ証拠を掴^{つか}んでやったよ。袖の下をたんまりもらってたり、女生徒に悪戯^{いたづら}したりな。奴等はみんな偽善者よ。偉そうに構えて人の道を説くなんてことは絶対に許せねえ。口でいうことと腹^{はら}の中で考えてることは全然違う。こっそりやるのは小汚いことばっかだ。そういう薄汚い外道^{げどう}どもが教育者だっていいやがる。冗談じゃねえや！ 世界を滅し、人類を破滅させるのは

核戦争なんかじゃねえ、こういう腹の腐った偽善者どもだ」

康夫は甦った怒りに燃え上っていた。東丈に逢って以来、康夫が放ったことのない粗々しい怒りの波動であった。

「許せない下種^{ゲス}どもを口が裂けたって先生なんて呼べるかい！ 心からの尊敬と崇拝をこめなきや、先生なんて呼べないよ！」

「怒ると康夫お兄さんって素敵」

と、少女がいきなりいった。からかっているのか、なだめようとしているのかわからない口調であった。

「おとなしすぎるのって厭。優しくて穏やかみたいだけど、本当に優しいんじゃないもの。去勢されたみたいだから」

「凄^しい言葉を知ってるな、去勢だなんて……確かに見かけは人格者風で、熱心、誠実この上ないって奴が、裏に廻ると大違い。白蟻^{しろあり}に食い荒らされた建物と同じで見かけだけ立派だっていう手合が多いものな。でも、光子ちゃんもそうだけど、俺の目にも、人間の裏の裏までちゃんと見えちゃうわけよ。熱心で誠実そうで、いい人だっていくら褒められてても、本当は点数稼ぎでやってるとか見栄や体裁ばかり気にしてるんだって内幕がね。

そんな薄汚い偽善者どもに、先生面させることはねえやって思っちゃうわけよ。イカサマ野郎が先生面で権力を握り、生徒の未来を全部握って、生殺与奪の権力を振るうなんて絶対に許せね

えんだ。いざとなったら刺し違えてやるって覚悟を決めてたもんだ。

そんな時、東丈先生にお逢いしたんだな。一目見ただけで体がぞくぞくしたよ。慄えが来ちゃって、この人には頭が上がらないって観念した。生れて初めて、しんそこ素直に、先生って呼べた。一生自分には先生なんていう素晴らしい偉大な存在は関係ないもんだと決めこんでたけど、本当の先生にとりとう逢っちゃったんだ。じっさい先生から後光が差してたよ。あの時は感動したし、嬉しかったな……純粹で心が綺麗で、人間の器がとてつもなく大きいんだからな。一口に言って、人間として偉大な人だ……心から先生って尊敬をこめて呼びかけられる人なんだ。自分より歳下なのに、そんなことは全然気にならなかった。そんな自分が信じられなかったな……俺は疑い深い人間で、裏の裏まで見通しても、まだボロを隠してるんじゃないかって疑う人間だったからな」

「東丈先生って、素晴らしい人だったみたいね」

少女の口ぶりには羨望があった。

「それなのに、逢えないなんて、あたしって運が悪い。いつもそう。巡り合せていうのか星廻りが悪いのね」

「そう決めこむことはないさ。先生はまた戻ってこられるし、先生がご不在でも、先生のお姉さんもいるし、郁姫様だっている。先生のお姉さんって素晴らしいだろう？ 先生を育てたお姉さんだから」